

佐伯地方の姓氏(十四)

伊藤氏・安東氏・阿部氏

伊藤氏は伊勢と伊豆の藤原氏

伊藤氏は故佐久間英氏の統計によると、全国第九位約七十万といわれるが、佐伯地方には案外に少ない。電話帳などで集計してみると、佐伯市・南郡の伊藤姓は約五十戸で、同じ発音の伊東姓に比べると三対一の割になる。

この伊藤氏の主流は藤原氏北家秀郷流、佐藤左衛門尉公清の六男左衛門尉公澄の子隼人正知基の次男伊豫守基景に出ている。基景は伊勢に住んでその族を伊藤と号した。二子基清、基信はともに伊勢に住み、伊勢平氏平正盛の郎党となった。基信の子が伊藤武者景綱、その子に伊藤五忠清と伊藤六景家の兄弟がある。忠清・景家兄弟は保元の乱のとき源義朝の手につき、院方(崇徳上皇方)の鎮西八郎為朝の矢面に立ち、強弓の的となって戦死し

た。

佐脇貫一

(会員・佐伯市長良)

伊藤五忠清には数人の子があったが、そのなかで有名なのは上総五郎兵衛尉忠光と悪七兵衛尉景清、兩人とも平家に属し、侍大将として源平合戦にさいし剛勇ぶりをうたわれた。兄上総五郎兵衛尉忠光は、主家平家の仇を報ずるため、建久三年(一一九二)正月、魚鱗を目にはって盲人を装い乞食姿になって鎌倉に潜入、鶴ヶ岡八幡宮に参拝する源頼朝を狙ったが、怪しまれて捕えられ処刑された。(吾妻鏡より)また弟の悪七兵衛尉景清は、馬入川の橋供養に臨む頼朝を狙い徘徊はいかい中捕えられたが、彼の武勇を惜み隨身を求め頼朝に対して、源氏の世は見たくないといふ放ち、自らその両眼をつぶした。景清は死一等を減ぜられて日向国に远流となった。(謡曲景清、この物語では平景清になっている)と伝えられるが、

これらはどうもフィクションらしい。しかし、宮崎市下北方には景清廟があり、大淀川をへだてたその対岸、同市生目には生目神社があつて、藤原景清を配祀し、昔から眼病の神として信仰されている。

伊藤六景家の子は景高、その子は兼高、以下子孫はいずれも伊勢の藤原氏というので伊藤と称し、裔孫十一家が寛政系譜に載っている。家紋は「上り藤の丸」「釘抜」など。

このほか近江伊藤氏があるが、これは中臣氏族由井伊香氏流で、同氏系図に「由井保房の子伊藤太盛安、伊藤次宗安」とある。また大和伊藤氏は橘氏族（御子神氏裔ともいう）、大和国人十市遠忠の後で小野派一刀流の祖といわれる小野次郎右衛門忠明（前名御子神典膳）の子典膳忠也（この流派を忠也派という）が一刀流祖伊藤一刀斎景久の名跡を継ぎ伊藤氏を称したものの。

なお相良系図によると、工藤氏族伊東祐隆は伊豆の藤原氏というところから、自ら伊藤祐隆と署名したという。こうした考えは同族である日向伊東氏も持っていたように、都於郡・門川・田島・木脇の各伊東氏にも、伊藤某と署名した文書が多い。

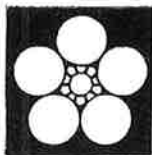
その系統は分明でないが、豊臣秀吉に仕えた武士に伊藤氏が数人ある。なかでも伊藤対馬守長俊は二万石を給され、伊藤彦兵衛盛景は小田原攻めの功により、天正十八年（一五九〇）美濃大垣三万四千石に封ぜられ長門守と称した。（いずれも慶長五年関ヶ原の役に西軍に応じて封地を没収された）

明治の元勳伊藤博文は本姓を林氏といい、父林十蔵は周防国熊毛郡束荷村（現熊毛郡大和町）の百姓だったが、武家奉公を好み萩城下に出て、毛利藩の足輕伊藤氏の名跡を継いだ。若いころ長州の志士として活躍した伊藤俊輔（博文）が、林宇一または越智斧太郎の変名を用いたのは、本姓林氏が越智氏族河野氏の一族であったからである。

佐伯藩毛利氏の家中には伊藤氏が一家、伊東氏が六家あるが、士分は伊藤氏一と伊東氏二、他は足軽・船手組となっている。

伊東氏と安東氏

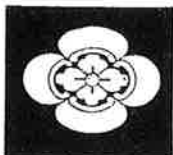
伊豆に発祥した工藤氏族伊東氏は藤原氏南家流であるが、この伊東氏が伊藤氏を称した場合もあることは前述



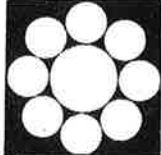
梅 鉢



丸ニ鷹ノ羽



横 木 瓜



九 曜



絵 扇

した。しかし、それは南北朝時代までで、伊東氏祐（祐持の子、前名祐重）の時改めて伊東と号したという。日向伊東氏の家紋は「月九曜」「庵に木瓜」「横木瓜」等である。

工藤氏族伊東氏の一族で、備中岡田藩主だった伊東氏は伊東入道祐親の後といわれ、秀吉の旗本「黄母衣衆」の一人伊東長次を祖とする。長次は関ヶ原戦の後徳川家康に召出された。家紋は「庵に木瓜」を本紋にする。

相良氏族伊東氏は相良維兼の子維頼に出ているが、相良氏は工藤氏と同じく藤原氏南家流。遠江国榛原郡相良荘に発祥した。維頼の子周頼は右京大夫と称し、伊東（木脇）祐光の二男光頼を子にした。この光頼が伊東と号したので、曾孫頼繁（相良大膳大夫）の子頼堯が伊東あるいは

伊藤大夫と称した。

佐伯地方には伊藤氏は少ないが、伊東氏は案外多い。とくに佐伯市内の上久部方面に目立つが、同部落伊東氏の伝承によると、下久部地域の内田氏とともに日向佐土原から移り住んだという。（これは下堅田泥谷の正明寺開基伝承を伝えたものか）なお伊東姓は上堅田地区（池田・長谷）に数十戸あるが、家紋は「丸に木瓜」「丸に違鷹の羽」「丸に梅鉢」など思い思いである。

また伊東氏や伊藤氏のはかに井東と書き、井藤と書く氏があるが、これは井と伊を置きかえた互に通じる名字のようであるが、井は本来、泉や流水から用水を汲みとる所、つまり井戸を意味するから名字の起りはちがうものと見なければなるまい。尊卑文脈によると、井氏（るの・いの）があり、近江の佐々貴宮神主佐々木行定の子、摂津国井於（るのえ）の荘官井ノ上行実に出ている。この行実の子が井ノ権守盛実、その弟井ノ五郎行方後に井ノ東源次があり、承久の乱のとき京方に馳参じた。井東氏に関係のありそうな氏である。

次は安東氏であるが、安東氏は陸奥の安倍氏族ということになっている。前九年の役（天喜四年一一〇五六か

ら康平五年（一一〇六）にいたる奥州安倍氏の乱で鎮守府將軍源頼義、義家父子に討伐された安倍頼時、貞任らの安倍氏は、平安初期に陸奥蝦夷の鎮圧に朝廷から派遣された征夷將軍安倍氏の配下になった原住民（蝦夷）の首領で、俘囚の長になって主家の氏を冒し、安倍氏を称したものである。

さて前九年の役のとき、八幡太郎義家（出羽守）の矢面に立って「衣のたてはほころびにけり」とよびかけられ「年を経し糸のみだれの苦しさに」と詠み返して、その風雅を伝えられた安倍貞任は康平五年九月誅伐された。貞任の弟宗任は降伏し、同七年（一一〇六）俘囚として京都に連行され、やがて伊豫国へ流罪になったが、治暦三年（一一〇六）伊豫から大宰府に移されたという。大宰府に移送された宗任は菡萏湾（別府湾）岸の白木浜に着船、陸路を大宰府に向ったが、宗任の子三郎実任は赦されて豊後に残り、豊後安部氏の祖になったと伝えられる。

ところで、安倍貞任誅滅のとき、貞任の次子高星はまだ三歳、乳母に抱かれて陸奥国津軽郡藤崎に遁れたが、この高星の子孫が安東、藤崎、安藤の三氏になったとい

う。安東・藤崎系図によると、高星の子堯恒は藤崎館守となり安東太郎と称している。そして堯恒の後は貞秀、堯秀、愛秀、堯勢、貞季と継承し、代々安東太郎を通名とした。貞季の二子、兄の盛季は安東を称し、下国城に住んで下国家とよばれ、弟の鹿季は出羽の秋田湊を攻略、秋田地方の領主になって秋田太郎と称したが、この系統を湊家と呼んだ。ここに安東氏は二家に分れたが、鹿季の後が秋田城介の名跡を継ぎ、下国家を合併して秋田氏になった。家紋は貞季のころから「檢扇に違い鷹の羽」を用いている。

安東氏には安倍氏族安東氏（陸奥）のほかに安房国安東に居住した桓武平氏良文流の安東氏がある。これは良文の子忠頼の後で常親（恒親）を祖にしている。このほか豊後安東氏は藤原北家秀郷流というが、系統は詳らかでない。安東氏は県下では大分市、臼杵市地区に多いが佐伯市には少ない。

阿（安）倍氏は古代氏族

阿倍氏はわが国の古代氏族で『日本書紀』（孝元紀）に大彥命は是れ阿倍臣、膳臣、阿閉臣、狭々城山君、

筑紫国造、越国造、伊賀臣すべて七族の始祖なり。

とあり、また『古事記』には

兄大毘古命の子建沼河別命は阿部臣らの祖

とあって、孝元天皇の皇子大彦命の御子武淳川別命の後裔ということになっている。

阿倍氏はまた安倍・阿部・安部・阿閉などと書くが、古氏族としての阿倍臣は武淳川別命の裔で、穂積・安倍・伊賀・阿閉の各氏が分れる。発祥地は大和国葛下郡阿部および十市郡阿部、また摂津の阿倍臣は東成郡（現大阪市）阿倍野から起ったという。

武淳川別命の裔は安倍臣あるいは阿倍臣と記され、大和、山城（京師）摂津、伊勢等に繁栄した。また『新撰姓氏録』によると、和（やまと）安部臣という一族があり、孝明天皇の皇子天常彦国押人命を始祖とし、その裔彦姥津命三世の孫難波宿祢が、十市郡阿部、高市郡阿倍山に住み、和安倍氏と称したもの。これを大春日氏族という。しかし、和安倍（部）氏は時代がたつに従って、本系の武淳川別命裔の阿倍氏と混同し区別されないようになった。

阿倍臣は大和朝廷の臣僚として、各々その居住地の地

名を本姓に連ねて一族の呼称にした。すなわち阿倍長田臣、阿倍小殿臣、阿倍引田臣、阿倍布勢臣というように名乗ったのである。

さて、阿倍氏で歴史上著名な人物に阿倍比羅夫がある。『日本紀』斉明天皇四年（六五三）の条に、阿倍引田臣比羅夫、船一百八十艘を率いて蝦夷、肅慎を討つ。阿倍引田臣・淳代二郡の蝦夷降伏す。という記録があるが、この比羅夫の族称引田臣は布勢臣と共に阿倍氏の主流で、大和国群田郷（奈良県桜井市安倍）を本拠にした。比羅夫は天武天皇十三年（六八四）十一月、阿倍朝臣姓を賜い阿倍引田朝臣となったが、その子宿奈麻呂は慶雲元年（七〇四）十一月、阿倍引田朝臣から阿倍朝臣になった。次で神護景雲二年（七六八）以後には、この一族の長田臣、布勢臣、小殿臣、狛臣らがいずれも朝臣姓を賜った。

「天の原ふりさけ見れば春日なる 三笠の山に出でし 月かも」

唐都長安で、この望郷の歌を詠んだ阿倍仲麻呂、彼はおそらく阿倍氏の主流、安麻呂か継麻呂の親縁者であろう。元正天皇の靈龜二年（七一八）遣唐留學生に選ばれて翌養老元年渡唐した。学成った仲麻呂はその博識宏才

を玄宗皇帝に知られ寵遇された。彼は幾度か帰国を思いたったが、その都度海難に遭って帰国ができなかった。彼は意を決して唐朝に仕え、名を朝衡と改めた。在唐五十余年、その間節度使として安南に赴き治績をあげたと伝えられる。宝亀元年（七七〇）神護景雲四年）一月、唐都長安で歿した。年七十歳。

古代の大族である阿倍氏は京師（山城）・大和を中心に繁栄したが、大和朝廷の勢力が東国に延びるに従って遠江、駿河、下総、岩代、磐城、陸前等に族類が蕃衍（ばんえん）した。宗族は朝臣の姓を賜ったが、支庶流は臣姓を賜与され、東国・奥州にその族党の本拠を置いた。すなわち阿倍猿嶋臣・阿倍安積臣・阿倍会津臣・阿倍磐城臣・阿倍信夫臣・阿倍柴田臣・阿倍陸奥臣などである。

阿倍氏族以外の安倍氏には大和国城上郡椿市村阿倍（奈良県桜井市三輪）に住んだ大伴金村連の後という安倍連姓がある。また『日本書紀』皇極記に伊勢の阿倍堅経という者があるが、後の中臣氏族系阿部氏につながる者と見られる。次に仁明天皇の承和六年（八三九）左京人外従五位下安倍宿祢真男に御輔朝臣姓を賜る。（続日本後紀）また醍醐天皇の延長三年頃の人に阿倍宿祢忠行が

ある。これらは出自不詳ではあるが宿祢姓を賜っているから阿倍氏族外の安（阿）倍氏に属する人々であろう。

陸奥阿倍臣と安倍頼時父子

ところで問題は安東氏の始祖である陸奥安倍氏であるが、この安倍氏は秋田安藤系図に祖系を伝述されている。それによると、武淳川別命の子瀬立大稲起命を祖とし、以下大稻誉命・大麻呂・摩侶・鳥子・目臣・大鳥臣・倉橋麻呂・益麻呂・御主人・広庭・比羅夫・安麻呂・小島・家麻呂・富麻呂・宅羅・隣良・忠良・頼良（頼時）となっており、一見して『日本紀』に出てくる阿倍臣を時代を追うて並べていることが判る。もともと秋田安藤系図は伝承を算線でないようなものだから、これに記紀の阿倍臣をあてはめた系図作者の意図に無理がある。いま一つの陸奥安信氏系図は藤崎系図とよばれているが、これは長髓彦（ながすねひこ）の兄安日王に出ている。安日の末裔である国東は四道將軍に従って功をたて安倍の姓を賜ったが、その子孫は奥州にあって鎮守府將軍に属し俘囚の長となつたという。そして頼良の父は忠良、その父は忠頼と伝えている。



梗 明 晴

梗 六九) 三月の条に

辛巳(十三日)陸奥国白河郡、

人外正七位上丈部子老、賀美

郡人丈部、国益、標葉郡人正六

六箇郡の司、安倍頼良なる者有り。是れ同忠良の子也。父祖忠頼は東夷の酋長にて、威風大に振う。村落皆服し、六郡を横行し、人民を劫略す。(中略)

〔頼義を〕拜して陸奥守と為し鎮守府將軍を兼ね、頼良を討たしむ。天下素より才能を知り、其の採択に服す。境に入り任に著くの初め、俄かに天下大赦

有り、頼良大に喜び、名を改め頼時と称す。(大守名と同じきため禁ぜらる)身を委ね帰服し、境内(国内の意か)また清し。 Ⅱ陸奥話記からⅡ

『陸奥話記』は十二世紀ごろの著作で、史料価値が高い。従って頼時(頼義)の父が忠良で、祖父が忠頼であり、忠頼のころから俘囚の長として威風六郡に振ったわけで、その点は藤崎系図の記載が正しいことになる。しかし、安倍頼時、貞任父子の安倍氏には、阿倍臣部曲のなかの阿倍陸奥臣の裔であるという明確な記録はない。

『続日本紀』神護景雲三年(七

位上丈部、賀例努等十人に姓阿倍陸奥臣を賜ふ。安積

郡人外従七位下丈部直繼足に阿倍安積臣、信夫郡人

外正六位上丈部大庭等に阿倍信夫臣、柴田郡人外正

六位上丈部、嶋足に安倍柴田臣、会津郡人外正八位下

丈部庭虫等二人に阿倍、会津臣の姓を賜ふ。

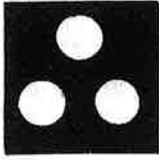
Ⅱ続日本紀卷三十一Ⅱ

この丈部は馳使部(はせつかいべ)のことで、職業部に属する。丈部の伴造である丈部直や丈部造もみな阿倍氏の族を称したので、賜姓にあたっては殆んどが阿(安倍臣)となった。

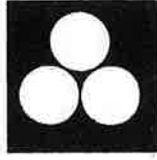
阿倍氏は平安朝時代に入ると安倍氏と書くようになってた。続日本紀にはまだ阿倍が多いが、日本後紀になると安倍が多く同姓同氏として扱われている。

陰陽家(公家)と大名家(武家)

平安時代中期の陰陽家で、よく識神(しきがみ)〔陰陽道で、陰陽師の命令に従って、変幻自在、不思議な業をなすという精霊〕を使いあらゆる事を未然に知ったという安倍晴明は伝説的要素の強い人物だが、『金烏玉兎集』『占事略決』等の著書がある。この晴明は文武天皇の大室元年(



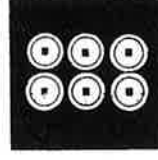
松浦星



三ツ星



福山鷹ノ羽



六連銭



梶ノ原

七〇一）右大臣になった阿倍御主人の後で、御主人の子中納言広庭七代の孫にあたる。晴明が陰陽家として天文博士になってから、代々陰陽道をもって朝廷に仕えた。子孫に土御門・倉橋の二家がある。安倍晴明判紋といわれる星形紋（晴明桔梗）は晴明が創始したものではないが、昔から厄除けの呪符として嬰兒の産衣などにつけられた。

『姓氏家系辞書』によると、旧藩大名家には阿部氏が三家、安部氏が一家ある。三河安倍氏とよばれるのが、元伯爵家の備後福山藩阿部氏で、これは古代氏族の阿倍氏ではなく、藤原北家道兼流の八田・小田氏族ということになっている。すなわち八田権頭宗綱の二男知家の後で、その末流が三河に住み安倍氏を称したが、後家号を阿部に改めたという。正勝

のとき家康に仕え徳川譜代として重きをなした。長男が大坂城代をつとめた備中守正次、元和九年（一六二三）武蔵国岩槻五万五千石に封ぜられたが、その子重次は三代家光の側近として重用され、老中をつとめた。家光が歿するやこれに殉死し、封領は子定高に伝えられ、曾孫正福とみのとき（宝永十年）備後福山藩十萬石になった。福山阿部氏の分家の上総佐貫藩一萬六千石の阿部氏で、重次の次男正春を祖にする。家紋は福山藩が「丸に右重ね鷹の羽」と「黒餅」、佐貫藩が「丸に左重ね鷹の羽」である。

阿部正勝の次男忠吉（正吉）の子が有名な阿部豊後守忠秋で、寛永十六年（一六三九）武蔵国忍に封ぜられたので「忍の阿部」として知られた。忠秋は「智恵伊豆」こと松平伊豆守信綱と並び称された家光時代の老中である。元禄七年（一六九四）忠秋の孫正武のとき本知九萬石に摂津で一萬石を加増、十萬石を領した。家紋は「白餅に鷹の羽打違い」。

駿河安部氏は寛永系図によると、諏訪盛重の子元真を始祖にするが、滋野氏の後ともいわれている。しかし、駿河国安倍郡に起った一族であるため、史家は古代の安

倍部曲の末と見ている。もっとも家伝によると、諏訪神社の神(みわ)氏一族で、南北朝時代に宗良親王を擁した宮方の一党と伝え、諏訪明神の神紋「梶ノ葉」を家紋にするが、替紋として「六連銭」を用いるので、滋野氏の一族ともいわれる。安部元真ははじめ今川氏に従い、後家康に仕えた。慶安二年(一六四九)元真の孫摂津守信盛が大坂城番となり一万九千二百石を与えられ諸侯に列した。宝永中丹波守信峯のとき武蔵国岡部(埼玉県大里郡岡部町)に陣屋を置いた。(二万二百五十石)

佐伯地方のアベ姓には「阿倍」と書くものは全くなく、ほとんどが「安部」か「阿部」または「安倍」と書いている。そのなかで安部がもっとも多く、私の集計でも百二十余を数えた。次は阿部で九十余、安倍は十余で鶴見町(中越)と佐伯市内だけ、なお安部は佐伯市内と蒲江町および鶴見町(羽出)が主で、阿部は蒲江町に多く、佐伯市内、鶴見町(有明)がこれに次いでいる。ここでおそらくいのは鶴見町のアベ氏で浦毎に文字を書き違えている。しかし、羽出浦安部氏の庄屋文書や修験許し状(寛文・元禄期)には阿部某とあるから、往時は浦別に書き違えるようなことはなかったのだろう。

安倍宗任と松浦党安部氏

大分市白木(大字神崎)にある宝珠山龍雲寺は安倍貞任十八代の孫式部卿貞親法師が永徳三年(一三八三)国守大友親世の招きに応じて来り、天台宗の一梵刹として開基したものと伝え、境内に貞任・宗任兄弟の墳があるという。また田ノ浦の海福寺灘地蔵は明応四年府内大智寺の十三世才伯禪師が開基したもので、寺は田ノ浦里正安倍氏の建立という。伝によると、康平五年安倍貞任が滅んで後、その族人がこの地に来り、海山の風景衣川に似たりと止って庵を結び、自ら地蔵尊像を刻み、高崎山の海洞に安置した。因って灘地蔵と称していたが、天文年中に洞穴より海福寺に移した。天正十七年(一五八九)安部因幡入道清運が同寺を再建したが、慶長元年の大地震で破却したと伝える。(雉城雜誌より)

大分郡庄内町(旧阿南莊)に熊群山東岸寺という寺院があった。豊前の英彦山に属する天台宗の修験寺院で、熊群山大権現ともよばれた。康平年中安倍宗任は当国(豊後を指しているが実は伊豫)に流罪になり、末子三郎実任はついに国人となって狩獵に日をおくった。あると

き熊牟礼山くまむれの峯を伝い、岩場を攀よじ登ると、多くの熊どもが集っていた。実任は弓に矢をつがえ射ようとしたところ、ふっと消え失せるように熊どもが逃げてしまった。不思議なことがあるものよと、熊どもが集っていたところに行つて見ると、そこには弥陀・薬師・観音三尊の像があるばかり、実任は奇異に思いながら三尊像を守護して宿所に帰り、浄所に安置して日夜崇敬した。ある夜の夢に白髪の老翁が現われ「われは是れ彦山大権現なり。当山に頭向すべし」と告げた。実任の子某（五郎という）は僧となり玉泉坊と号し、父に代つて熊群山大権現に奉仕したという。（雉城雑誌より）

宗任肥前国に流罪せられ、松浦の渡辺源次に預けらる。源次一人の娘ありしを宗任に妻合せて下松浦に住せしむ。其子三郎実任これなり。（筑紫軍記より）

肥前の松浦党のうち、宗任の後を下松浦党という。

またある説に、元応二庚申年（一一三二〇）奥州安倍氏の裔常陸鹿島より下向、白木（大分市大字神崎）に住す。七代の孫又次郎惟重、永享三亥年生石に移る。これ駄原阿部の始めなり。（駄原阿部氏伝承）

大分地方の安部・阿部二氏には安倍宗任を祖とする伝

承が多い。しかし、なかには大神氏で、惟基の後という氏もある。

大友氏の水軍は国東浦部衆と海部浦部衆になっているが、その構成分子には伊豫水軍の河野・村上党や忽那党とともに下松浦党が加っている。大友義鎮家中の新参衆百五十氏のうち肥前松浦党に關係のある名字は波多・中村・川原・渡辺・田中・鶴田などである。

佐伯地方の海岸部ではとくに中浦（鶴見町）が大友氏の關係で松浦党に縁があるらしく、安部・阿部・安倍三氏をはじめ、島田・成松・浜崎・松浦・山代（城）等名字がある。なお佐伯地方の安部氏の家紋はさまざまであるが、鶴見村では「丸に三星」がもっとも多い。なかには松浦党の松浦氏の家紋「松浦屋」を模した間隔の離れた三星を用いる家もある。そのほか「二重丸に三目結」「丸に三柏」「丸に違い丁子」などが使われている。

（つづく）